

都 退 教 協 だ よ り

No.282号

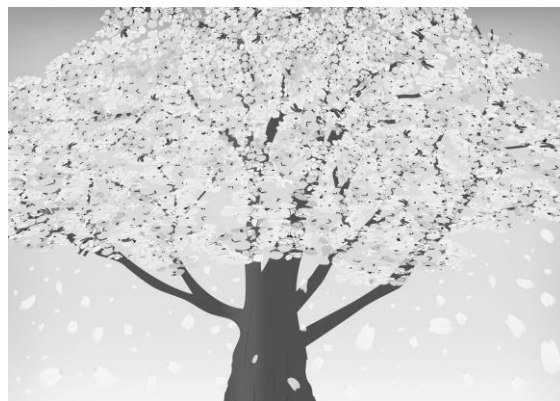
2018年2月21日発行

東京都退職教職員協議会 会長 柴田 迪春

〒101-0003 千代田区一ツ橋 2-6-2 日本教育会館 2F 東京教組内

☎:03-5276-1311 FAX:03-5276-1312 Mail:totaikyokyo@tokyokyouso.org

お花見のお誘い



梅の香に春の訪れを感じる季節になりました。恒例の「お花見の会」を下記のとおり行います。コースは東京教組から北の丸公園を経て竹橋まで散策します。今年も都高教退職者会と合同で行います。皆さん奮ってご参加ください。

日 時 4月4日(水) 午前11時
集合場所 東京教組書記局(日本教育会館 2F)
神保町駅下車A1出口より3分

※例年通り、花見のあと、2~3000円の予算で懇親会を開きます。

皆さまの参加をお待ちしています。

当日の連絡は、柴田会長 090-6700-7087
谷口事務局長 090-5202-0117

会員の声 (その2)

今、私にできること

武田好永

母親の介護などのため、ずいぶん遅れた教師としての出発でしたが、退職して14年になります。それまでいろいろなことをして過ごしたいへんな思いもしましたが、教師になって、とてもたいへんなことに会っても、なんとか乗り越え新宿を最後に退職しました。現在は憲法9条を守る、その他いろいろな悪法に対して反対をし、よく国会前、日比谷野音に行きます。これからのことを考えると、このままこの状態を若い人達に渡したくないという思いのみです。若い時学校で勉強してすぐ教師にならなかったことが非常に役に立っていると考えます。点数をとるだけのことが如何に弱いかわかっています。

明るさの见えない現状ですが、「今、私にできること」を考えて毎日暮らしています。最後になりましたが、いつもお世話さまです。

首から上は健康です

上野禮子

米寿の年齢ともなり、一口に言って「首から上は健康です」と言うところでしょうか。足がすっかりと弱くなり、そんなはずはないのに？思いです。四人の兄妹とも仲よく、次男にも助けられつつ幸せに過ごしております。

「君は学校に来すぎだよ」

堀越 新

教員をやめて、もう20年以上たってしまいました。きくところによると、先生になりた

い人が多いのに、現実はある程度面白くない
ようですね。

仕事だ、事務だ、報告だ、働きすぎだとか。

「昼休みは職員室にいないで、外へ出て生徒とあそんで下さい。」と先輩の先生に言われました。砂場で相撲をとって、勝ったり負けたり大汗、泥まみれ。自分の授業と補教の時間をつないで、午前中4時間通してソフトボールをしました。誰も何も言いませんでした。私は体育科の教員ではありませんでした、けれど。

「夏休みは、なるべく学校は来ないでください。田舎へ行くもよし、旅行もよし、山へでも、海へでも行って充電して下さい。だいたい君は学校に来すぎだよ」教頭先生はこうおっしゃいました。

大義を捨てた政党

日比野正道

選挙戦、真っ只中、こんなこと書いても仕方ないと思いながら。

「名を捨てて実を取る」と民進党党首の前原氏は言って、希望との合流を強行した。でも、政党にとって「名」とは何だろう。大義名分であり、その名のために結社を作り、政治に関与していくものだろう。選挙の結果が、たとえ今より良くて、大義を捨てた政党な

ど、存在価値もない、単なる政治屋・選挙屋にすぎない。野党第1党の党首の名がまったく出ない今度の選挙には怒りさえ覚える。都退教協として、政党支持を表明する時は、よく見極めてもらいたい。

雑感

生井栄一

退職してから百姓20有余年、現在、糶穀堆肥づくりに凝っています。油粕液肥も手づくりですが、バラ、野菜によく利きます。ところで、衆議院選挙は、自民党、改憲派の圧勝で終わりました。残念でたまりませんが、救いは、立憲民主党があつた短期間で、少数ながら野党第一党になったこと。国会内で野党共闘を積極的に推しすすめ、院外の市民活動とあわせ反戦平和、反原発の活動を継続すること、そして労働組合が、働く者の多くを賃金・時短の闘いを軸に結集することが次への展望を切り拓くのだと思います。

会報にのせられた及川さんの論文は“生前退位”という現在の課題を切り口に右傾化している現状への批判であり、相変わらずしっかり勉強しておられます。みんなで声を出し合っていくことが、今必要な時機なのではないかと私も思いペンをとりました。企画に敬意を表しつつ。

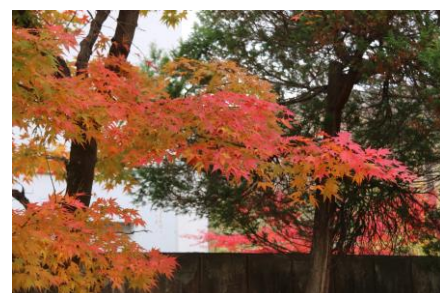
第2回日退教福島学習の旅

「福島原発事故から六年半・・・福島の現状は・・・」

藤崎喜仁

原発事故から早くも6年半が過ぎた。日退教は昨年引き続き第二回目の「福島学習の旅」を11月19～20日に実施した。各都道府県から40名以上の参加者があつた。会場は昨年と同じ飯坂温泉の「あづま荘」。時間があつたので都退教の谷口氏と飯坂温泉駅から会場まで歩くことにした。奇しくもこの日は寒波の到来で雪がチラチラと舞い降りる寒さだ

つたが、山の木々の葉は色とりどりに染まり紅葉の美しい季節でもあつた。20分ほどの温泉街の道のりは、さほどきつくもなく辺りの山々の紅葉を見ながら楽しく歩け



た。後でわかったことだが、初霜・初雪・初氷が福島の各地で見られたたそうだ。

最初の学習は「原発いらない」放射能から市民を守る会の事務局長 木幡忠幸氏から、原発事故と南相馬市の現状についての報告でした。

福島原発事故は三つの原子炉での水素爆発と炉心溶融によって、高濃度放射性物質を東北から関東全域にまき散らした。また福島第一原発事故で初めて発見された内部被爆の危険性がある「不溶性放射粒子=セシウムボール」は、微細なガラス玉に放射性セシウムが閉じ込められ、これを体内に取り込むと局部的に強く被爆し、体外に排出されるまでに通常より時間がかかり、大人で70倍、7歳未満で180倍も被爆するという。さらに、広島原爆の168発分ものセシウム137を大気中に拡散させ、環境汚染を引き起こし、10万人をこえる人達を強制避難させた。

そんな中で南相馬市に2013年に「核兵器廃絶都市宣言」と「脱原発都市宣言」を採択させた。学校は今年の4月小高地区と檜葉町の小中学校が再開したが、放射線量は依然として高く、戻ってきた児童生徒数は震災前の13%に過ぎない。

2018年4月開校に向けて富岡町で戻る意向は僅か9世帯(1.9%)であり、浪江は251世帯(3.6%)がすでに居住。飯館も254世帯(14%)が居住しているが、何処も帰還へのハードルは高く老夫婦世帯が多く若者は戻ってこない。

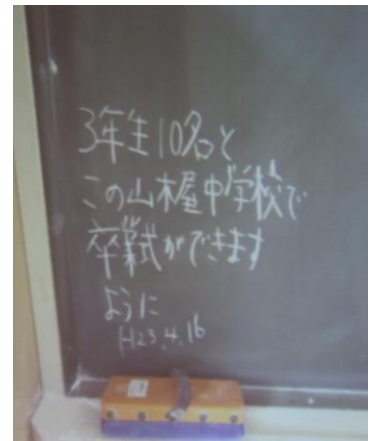
また、スーパーや地域医療・介護施設の充実、交通手段の確保など様々な整備が整っていないことで再建の道は困難を極めているのが実情だ。

第二の学習は福島県教組 福島支部長の佐藤毅氏の教育現場の現状の報告でした。佐藤氏は震災当時、川俣町山木屋中学校に勤務していた当時の状況を報告。

山木屋地区は中通りで唯一の計画的避難地域になっており、放射線量も $1\mu\text{Sv}$ の高い量を超えていたが、教育長は入学式の実施を強要してきた。伝達手段もなく教員は家庭訪問をし

て、生徒には「来ても来なくても良い」ことを伝える。地震の甚大な被害もあり、家に住めなく来られる状況ではない家庭も多かった。

4/15日に教育長は小中合同PTA総会で保護者に、4/18から山木屋中学校は南小学校に移転する旨の話を突如告げた。教員の誰もが知らされておらず、総会の際は



大混乱状態だったという。小学校間借りでの授業は、中学校の教材が全くなく、黒板だけの授業しか出来なかった。だが、次の年に突然小学校は無理だからと川俣中学校に移転になる。2018年4月には山木屋に戻り、山木屋小中学校として再開するという。いずれにしても行政の無展望な混乱とそれに振り回される現場の教員の苦悩が思いやられる。

山木屋地区は町が避難解除の要望をして2013年に解除になった。しかし、平らで日当りの良かった田んぼや畑は、汚染土のフレコンバックが敷き詰められた仮置き場となった。

帰還者は元の人口の2割で、ほとんどが祖父母と云う。山木屋はもともと辺鄙な山奥だったこともあり、避難先の方が何かと便利と思う人もいて戻りたいと思う人は増えそうにもない。小学校は4年間入学式をやっておらず、5-6年生10人しかいない。学校がなくなれば、いずれ地域が崩壊する日もそう遠くは無いと思われる。

学校では年間1~2時間、放射線についての授業をする。教材を作ってやっているが放射能に対する関心や意識が薄くなり、シーベルトやベクレルの違いも答えられず風化しているという。今後放射線教育を継続的に教え、危険な放射能の理解をどこまで定着させるかが課題と云う。

2日目は福島県教組から線量計を借りて、

「避難指示区域」(避難解除準備区域・居住制限区域)の村や町をバスで巡った。竹中柳一さん(福島退教・元県教組委員長)の案内でバスは進む。飯野町・川俣町を通過する。道の両脇の畑には前日に降った初雪がうっすらと積り、朝日をきらきらと反射している。木々の枝に降りかかっている雪もきれいだ。最初の到着地は飯舘村の前田公民館だ。

公民館の向こうには畑だった場所に、フレコンバッグの山が大量に緑のビニールシートで覆われ積まれている。1.5mの空間線量は0.35 μ Svだが5cmの地面は0.97 μ Svと高い。

当初の予定は酪農家の長谷川健一さんの牧場に行くはずでした。しかし、前日の初雪で牧場がぬかるみバスが入れないため、前田公民館での講話になった。

飯舘の放射線量は福島の二倍あるが、国は線量をいかに低く見せるか抑えるか操作している。飯舘村は良いところだったが、今はフレコンバッグの山が至るところにあり、235万個もあちこちに仮置きされている。福島県全体では2200万個もある。

事故当時は原発から45Kmも離れており、放射能に対する認識不足もあって避難が遅れた。京大今中教授は「危険、人は住めない」と警告したが、長崎大の教授は「大丈夫」と安全神話をばらまき、自主避難者が戻ってきて被害を拡大させた。

そして、飯舘の村長は住民避難を拒否し村を守ることを最優先させた。村民は村から一時間圏内に避難して村に通い、二年で村の再興をはかることを告げた。

村民の悲劇はここから始まる。まず汚染された牛全部の屠殺を命じられ、相馬市の酪農家は前途を悲観して自殺。飯舘の102歳のおじいさんは「非難の足手まといになる、長く生き過ぎた」と自殺。南相馬市のおばあさんは「私は墓に避難します」と・・・。

浪江では牛舎に入れられたままの餓死した牛を豚が食べるなど想像を絶する光景も起きていた。

10/28日から大熊町と双葉町の間貯蔵施設が稼働した。

大熊の「土壌貯蔵施設」は5万立方mだ。今後貯蔵設備を広げ、東京ドーム18個分にあたる福島県内の汚染土の2200万立方mを保管する予定という。これらは汚染土だが、可燃物のフレコンバッグもあり、これらの数は明らかにされていない。可燃物を燃やした焼却炉からは、焼却灰がフィルターを素通りして放射能汚染を拡散している。



村長は村の再建を「道の駅」や「幼・小・中一貫校」「全天候型の体育館」の建設など目に見える「箱モノ」に目が向いている。放射能対策や村民のくらし・安全や健康は二の次になっているのが許せないと云う。

事実「道の駅」には、コンビニが二軒あるが人が誰もこない。村はコンビニに一時間に1250円の助成金をだしている。「道の駅」のオブジェに1600万円とか金をかけ、「幼・小・中一貫校」「全天候型の体育館」の建設には63億円をかけている。

かつて酪農王国だった飯舘は、今は野生の王国になった。イノシシ・サルはどんどん増え続け、我が物顔で歩いている。いずれ「人間が野生動物に囲まれた枠の中で生活」するようになると長谷川さんは冗談交じりに言うが、人が住まない、住めない村の荒廃は深刻だ。野生イノシシの肉は、1600Bqと高濃度の汚染だ。

村は田畑の維持管理(耕す・除草)に10aあたり5千円の補助を出している。上限が35000円でそれも来年度で打ち切り。長谷川さんは耕作が出来ない家の農地を、有志の農家

5人で耕作し蕎麦を作っている。蕎麦は50 Bq以下の基準をクリアし、商品になったが風評被害で買いたたかれる。

蕎麦の乾燥施設を飯館に作るため国と交渉し3年もかかった。ようやく認可が下りて来年から乾燥施設の建設着工に入るといふ。

飯館のキノコの汚染度はけた外れ。通常は線量計で $0.3\mu\text{Sv}$ が28000 Bqもあった。

これを村民は食べている。食品として体内に入ると内部被爆するので怖い。

それで食品放射能検査機も10台入れることにした。

チェルノブイリにも行ってきて、乾燥キノコもらったので調べたら1730 Bqもあった。

事故から30年経ってもこの数値に驚く。長谷川さんは最後に言った。「チェルノブイリから日本は何も学んでいない」と。

飯館の前田公民館を後にして、その途中で飯館の「道の駅=までい館」に立ち寄る。長谷川さんの言った通りの立派な建物だ。そして、1600万円のオブジェもあった。人の数は少なく、駐車場には20台ほどの車が。

そこから南相馬市と小高区(旧避難解除準備区域)に向かう。道の両側は耕作放棄された畑黄色の花をつけたセイダカアワダチソウが群生して占領している。乾燥した地にはススキが連なっており、民家の周りも雑草に囲まれている。それを過ぎると浪江町に近づく。あたりの風景は先ほどと一変し、三段・四段と縦にも積まれたフレコンバックが道の両側に迫ってくる。真っ黒な色は異様に見え、見る者を圧倒し不気味な恐ろしさを感じさせる。その数はとてつもなく多く、バスの中の線量も $0.42\mu\text{Sv}$ と高かった。

浪江の駅に着く。昨年見た駅前の傾いていた家は、取り壊され更地になっていた。廃墟の商店街も、更地が増えており様子が変わっていた。地面の線量は $0.53\mu\text{Sv}$ で高い。昨年まで無人駅だった浪江駅も、4/1日から小高→浪江の8.9Km tが開通。

駅前広場にはタクシーも一台駐車し、運転手が車を洗っている姿がわびしく見えた。集合写真を撮り再び元の道に戻り福島駅に向かう。

一年前は荒涼とした風景があったが、今年は耕作された土地もあり荒涼感は少なかった。あちこちに点在していたフレコンバックは、置き場がまとめられ大きな緑のシートで覆われていた。町の姿や風景は日々変わっていくが、人の心も日々変わろうとしているのだろうか。飯館の村長は村の再建を「見える豪華な箱もの」で置き換え、そこに住民を戻そうとしているがそれで良いのだろうか。

安心して戻れる町や村は、放射能で汚染されすぐには住めない。インフラ整備もほとんど進んでいないし、進められる状況にはないのだ。家族も離散してバラバラだ。六年半の歳月は、それぞれの生き方を決めている。

そして、原発事故前の豊かな暮らしには誰も戻せない。この耐え切れないほどの怒りと悲しみは、時の経過と共に人々の意識から消し去ってはいけない。

原発政策を無展望に安易に進めた政府や東電の無責任さを許さず、福島の人々の心に寄り添った闘いをこれからも続けなければと思った。最後に、昨年に引き続き二日間の行動を受け入れ、その、準備に多大な労を取って下さった福島県退教住谷会長、浦井事務局長、バスの視察にあたり被災地の現状・課題をお話しいただいた竹中さんに感謝いたします。



「憲法」 一つの出会い

柴田 廸春

憲法施行から5年後、社会科担当の先生から、授業中に次のような指示が出されました。「3年前まで出されていた『民主主義』（上・下）という教科書があるのだが、なぜかその後出されなくなってしまった。君らの2年、3年上の先輩たちが持っていると思うので、近所の先輩たちから借り受けてきてもらえないだろうか」

私は、自分が1年の時の3年生だった人たちの家を何軒か訪ねて、先生の指示通りの話をして借り集めてきました。「借りられなかった」人も何人かいましたが、全部で一クラス分は集まったようです。このテキストを使って何時間授業をしたかは覚えていませんが、3～4時間やったと思います。

表紙に『民主主義』上・下」と印刷されているその2冊の本は、後年「複製本」を手にした時も同様ですが、分厚く大変「立派」なもので、作成時の政府の意気込みを表してい

るように感じました。内容は、「日本国憲法の解説書」で、文章は分かりやすく丁寧で、それを読むだけで、中学2年生が十分理解出来ました。この通りにやれるなら、「日本はすばらしい国」になるだろうな、と実感させるものでした。

しかし、現実には、「米ソ冷戦」、中華人民共和国成立などを背景に、連合軍極東司令部（マッカーサー司令官）の対日政策も変わります。これに1950年6月25日に起こった「朝鮮戦争」が重なり、保守政権である日本政府は「忖度」も加わり、「右寄り路線」へと舵を切ります。こうして、「広く国民が憲法を学ぶ機会」は限定されることとなります。「教育基本法」改訂を目的とする審議会設置も、施行2年後の1949年です。私たちが（読本）「民主主義」を借り歩いた経験は、保守政権が「改憲」へ踏み切る「証し」の一つであったとも考えられます。

編集後記

- ◇ 名護市長選挙は残念な結果になりましたが、稲嶺進さんは、敗戦の翌朝も子どもたちの交通安全誘導をいつも通り務めていたそうです。都退教協は、皆さんからいただいた沖縄支援カンパを沖縄県退職教職員会にお渡しいたしました。
- ◇ 沖縄と連帯する日退教沖縄交流団を募集しています。4/23～4/24 現地集合・解散です。ご希望の方は谷口までご連絡ください。(090-5202-0117)
- ◇ 安倍9条改憲 NO!署名は、167筆になりました。第2次集約は、4月25日です。まだの方は、ぜひ送ってください。280号に、署名用紙と切手不要の返信用封筒が入っています。新たに必要の方は、都退教協にご連絡ください。
- ◇ 今年度の年金は、据え置きになりました。国民年金は満額で64,941円。夫婦二人の国民年金を含めた標準的な厚生年金は、221,277円になります。
- ◇ シンドラーエレベーター事故和解のチラシを同封させていただきました。被害者の市川大輔さんは、退女教事務局長の朝倉さんの教え子でした。朝倉さんは、この裁判を支援し続け和解を勝ち取りました。
- ◇ 会員の脇三夫さんが2月2日に亡くなりました。脇さんは、長年、港教組の委員長を歴任されました。ご自身が体験した東京大空襲の竜巻のように燃え上がる炎を描いた絵が印象に残ります。
- ◇ 三寒四温とはいえ、寒い日が続きますが、会員の皆様、インフルエンザの猛威に負けず、元気で春をお迎えください。(谷口記)